

防災力向上と自主防活動の在り方を考える

「防災フォーラム」(市・NPO法人防災サポートいちのせき主催)は3月9日、川崎公民館で開かれ、市民や消防・防災関係者約150人が防災力向上と自主防災組織活動の在り方について考えた。

あいさつに立った平野和彦市消防本部消防長は、市が昨年制定した「となりきんじょ防災会議の日」を紹介しながら「震災の記憶を風化させないために、震災の教訓や被災体験を語り継ぐために、家庭や地域で話し合ってほしい」と呼び掛けた。

フォーラムでは、盛岡地方気象台の阿部秀俊次長が講演。阿部次長は昨年8月に新設された特別警報に触れ、「特別警報が発表されるということは非常事態であるということ。発



1

表されてから避難するのでは遅い。早めの行動や対応で尊い命を守ってほしい」と訴えた。

報告では、コミュニティ強化事業実施本部の千葉政弘本部長が「地域団体が連携した防災への取り組み」と題して発表。中里地区の3つの自主防災クラブの合同訓練などを紹介した。



2

1_約150人が防災力向上と自主防災組織活動の在り方について考えた防災フォーラム
2_講演する盛岡地方気象台の阿部秀俊次長



1



2

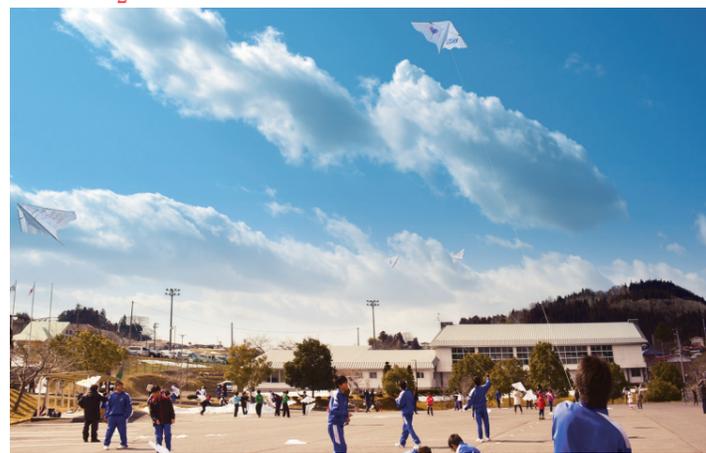
豪州姉妹都市との同時たこ揚げ震災復興プロジェクト

同じ空の下、復興の願いと絆を乗せて

「豪州姉妹都市との同時たこ揚げ震災復興プロジェクト」は3月9日、藤沢スポーツプラザと藤沢公民館駐車場で行われ、市内の小中学生と保護者ら約130人が震災復興の願いを込めて手作りたこを空高く揚げた。

同プロジェクトは、2011年に洪水被害を受けた国際姉妹都市オーストラリア・セントラルハイランズ市と東日本大震災で被害を受けた本市が、互いの復興を願いながら両市の絆を深めようと市と藤沢町国際交流協会(高橋義太郎会長)が企画。両市の小中学生が復興の願いを込めながら文字や絵を書いた100枚のたこをそれぞれ交換した。同日は、参加者のメッセージを加筆して、日本時間10時にたこ揚げを開始。同じ空の下、両市の願いを風に乗せた。藤沢小1年の畠山友良さんは「たこ揚げは難しかったけど、楽しかった。来年も参加したい」と笑顔を見せた。

1_セントラルハイランズ市(以下、セ市)で行われたたこ揚げ/2_セ市から送られたたこにメッセージを書き込む児童たち/3_大空にたこを揚げる参加者たち



3

●市内の取り組み

あの日を忘れない

震災を「運命」として、過去の出来事にしてはならない。教訓として、未来へ生かすことが私たちの「使命」だ。今、あらためて真摯に向き合おう。それが、明日への道標となる。



3/11 追悼夢あかり

内陸の祈りと思いを夢あかりに

冷たい夜に、暗闇を夢あかりがほつこりと照らす。「3月11日追悼 夢あかり一閃」(同実行委員会主催)は3月11日、市役所前の噴水広場で行われ、市内外から参加した約350人が震災で亡くなった人たちの冥福を祈り、被災地の早期復興を願った。

同日は、阪神・淡路大震災で被災した神戸市から分灯された「神戸希望の灯り」を約二百本の竹筒一本一本に点灯。実行委員会の小岩登志子代表(71)は「内陸の祈りを、私たちの思いを届けましょう」と語り、全員で東に向かって黙祷を捧げた。

同日は平泉学童保育「すぎのこクラブ」の児童と一関修紅高音楽部の生徒が復興支援ソングを合唱したほか、千厩町の津田幸男さん(64)がオカリナを演奏して人々の心を癒やした。

参加者は「希望」「絆」「幸」と書かれた夢あかりを、時間いっぱいまで見つめていた。